

けふ此二人のおかしき手あひをみて、こなたには何事も思ひよらず、あまりほむなさに、
斧の柄は朽ぬにもどる花見哉

寛文二年三月中旬

立圃

〔日本行脚文集〕圍碁記 白色空陽の大極は形よりうへの至誠の具、黒色相陰の無極は象より
下にあらはれて明德の器なり、所謂二か一かの顯密、動靜端なく、變化窮りなきの矩ぞおかしき
や、焉によりて是を慮に、棋一局の上に、盤法碁一の修行あり、一手いづれの先にかへる、一三をう
み、三亦三をよびて、九曜を聖目と名づく、細目は年月のた、かひ、三百六十の骨頭の奴婢も思慮
に退屈手に無盡の公案を困じにたれば、九萬八千の毛孔の眷屬も分別に汗を倦、兩人二儀の中
央、土臺四角の金色盤、其色黄なる藓盤を錬合し、その音宮の響子聲丁々然たり、石に黑白の凡聖
を見せ、四教五時の手だて、八宗に經緯たり、中にも九年盤壁の蘆の葉入道、自己の心眼を二…て、
上根上智の願から水をかけ、高談善巧の唇に蕃椒を吸つけしも、まらぬ顔したるぞ世一の碁所
とはいふめる、此玉盤會下に、不變常先の碁祖六祖、七目亂のつくり物をむねとし、一千七百則の
碁鏡をつり、四目ごろしの狗子髻髮、六目むさしの野狐童をはじめとして、高慢魔心の障費し
を塵にせんとなるべし、嗚呼先手は既に沙羅林にさり、後手はいまだ鷄頭城の碁筒より出す、番
除の中座に、鬮を見て、無門のせきのやぶれに爪弾し、不禪の根なし石にかたづをのむ、亂碁粉灰
の抓合になりて、碁代をあらそひ、あるは竹の節の圍に逍遙し、寢濱の原に遊戯す、下手の永膝、百
會の禪鞠をおとし、五陰幻城の責合に駁を進み、四虵泡軍の追落しにすくみ手をうち、又は三有
沈淪の仇手、五夢顛倒の悔手、碁敵の因果綽をいどみ、碁罵に舌をかへさぬ、文に曰く、横無初終二
世碁心、たがひに前生の罪を質とり、手だまし、五慾の鬆、三毒の飛に、袒裼ト俛焉ト無明の手負石
に煩惱の門をはく、かつ邪正一目を捨、十地に躓をねらひ、無爲の罟地に尖まはる、ある時は二河